ひかりのこ　昭和61年2月20日　第5号

光の子

発行／社会福祉法人光の子どもの家
編集／光の子 編集委員会
〒349-11 北埼玉郡大利根町砂原277
TEL／0480－72－3883
振替　東京3－128022
印刷　（株）ドモン企画

祈る手（ルカ　二二・三二）

福島　勲

つれづれに手許にあった絵画集で、デューラーをみて多くのことを考えさせられた。

デューラーはドイツの画家で、宗教改革の時代の人である。彼はカトリックの信者であったが、その信仰内容はプロテスタント的のものであったと思われる。ルターは彼の死にあたって「デューラーのために悲しむことは敬虔なる者のつとめである。しかしキリストは彼に幸なる終りを与えられた。」と弔詞をのべている。

いくつか有名な絵があるが「四人の使徒」もその一つである。

二まいのパネルに右側にパウロとマルコ、左の側に右からペテロとヨハネが描かれている。

若いヨハネは手に聖書をもって立っている。ペテロはヨハネより後方で例の鍵をもっている。

解説者は、教会の権威を主張することの代表者、鍵を握るペテロよりも、聖書の教えの大切なことを主張するためにヨハネを前面に大きく描いているのであるとコメントしている。

この説明を読んで、パウロの方をみると、パウロも左手に聖書をもっていて、これが絵の前面に出ているが、見のがせないのは剣を右手に杖のようにもっていることである。これについては何も説明していない。

わたしなりに考えるのだが、パウロも、もちろん神の言を中心にしている。剣はイエスが言われたように「剣をとる者はみな、剣で滅びる」（マタイ、二六・52）ので、不要のものである。

しかし、パウロの眼はらんらんと輝いている。宣教へのみなぎる闘志のあらわれである。それは戦いにも似た峻厳激越なものである。

後方に描かれた剣は、この内に秘めた戦いを表現しているのかもしれない。

「祈る手」も有名な素描の一つで

ある。長い指、労働者の手とは思えないが節高い手、そしていささか太い静脈が甲に浮き出ているのは年輩者の手だろうか。

めくれた袖口からは男かとも思われる。リストから先きだけより描かれていないので、顔型は見る者の想像に俟つより外ない。

それだけだが、まことに敬虔さの奥深く漂う絵である。

祈りは静的な時でもある。このスターテックな時の中にわれわれの、神の前でのさんびや、感謝や、ざんげや、願いや決断がある。

われわれの施設に思いをめぐらせてみる。関わりのある特定の人だけが祈っているのではない。われわれの知っている顔の人だけでなく、われわれの知らない多くの人々の祈りの手があるのである。

わけてもキリストの祈りに支えられているのである。

ここに望みがあり、勇気が湧く感謝すべきかなである。

回顧と展望

今関　公雄

光の子どもの家は、本当の意味での「子どものための子どもの施設」を、キリスト教社会福祉実践の証しとして設立したいとの願いから誕生した。よってわれわれの回顧もまた、どれだけ「子どもが主人公」になっているかという視点から省みることが肝要となる。

昨年七月の施設開設以降、二～六才の幼児のみ延べ十四名の養護活動に取組んできた。これらの入所児たちは、三軒の家に四～五名ずつに分かれ、各三（二）名の担当保母がその養育に当っている。定員三十名で各家十名（一・二階各五）の生活規模からみるならば、卒直にいって入所児数が極めて少なかったことになる。

この点、子どもたちの養護活動にとっては、基本的条件が好都合であったと考えられる。それは、一口に云って、乳幼児期に肉親に十分甘えることができなかった子どもたちであることにうかがわれる。施設入所以降、ダッコ、オンブをはじめとするスキンシップの必要性がこれほど顕著であったことは、驚異でさえあった。また、各家での食事・入浴・就寝などでの豊富な言葉がけも目立った。まさに少数入所は、開設早々において、子どもたちにとり情緒の安定と言語発達のうえで、真に幸いであったといえよう。

一方、新卒の担当保母にとっても、少数入所が好都合であったといえる。文字通り、一人ひとりと丁寧に取組むなかで、保母に育つ機会となったといえよう。職員集団の成長過程にとっても、この初年度の歩みは、ほぼ妥当であったと考えられる。これらを総合的に振り返るとき、子どもを主人公にしようという基本姿勢は、ほぼ堅持したと評価できよう。問題は、子どもとの取組みの質にある。今後の幾つかの課題を提示したい。

第一は、キリスト教児童養護への共通認識の涵養がある。子ども観・養護目標・生活共同体への聖書的理解の掘り下げといえる。その根底となる、毎日の小礼拝と週一回の夕礼拝の充実、教会の主日礼拝への出席励行と子どもたちの教会学校への出席も拡充したい。

第二は、新年度よりの学齢児入所にともなう、年齢幅と人数増大での養護内容の充実がある。保母は五名以下の子どもを担当するが、各家十名近くの集団規模になるとき、どれだけ集団の調和と個の尊重を実現できるかである。

第三は、家族関係の調整による子どもと親の関係回復がある。この場合、どれだけ〃出前福祉〃を実践できるかが問われる。

第四は、小学校や幼稚園への通学（園）にともなう、地元への参画による相互啓発の役割がある。地域社会に役立ちたい。

光の子どもの家は、家庭的処遇を根本原理とし子どもにとっての第二の実家を指向する。保護者との共同養育も大切にする。ただ、父性と母性のペアによる養育が不足しがちといえ、各家の閉鎖性も克服したい。そのためには、情緒の安定と子どもの社会化を志向し、「共に育つ」関係を築きたい。

新任の理事となって

小林　義雄

「光の子どもの家」の子ども達の過去に、どのようなことがあったかは知りません。しかしながら、私どもの想像以上のご苦労があったことは、親元を離れて生活をしなければならないという事実をみても、今迄子ども達にとって好ましくない環境であったことは間違いないと思われます。

宿命、または運命のいたずらかはわかりませんが、このことは子ども達によって生じたことではなく、大人達の我がままや勝手によって生まれたことであります。

人間が生れながらに持っている「幸せになる権利」が、大人達の都合によって左右させられてよいものかと痛感されます。これらのことがらについては、総べての大人達が「そうであってはならない」として児童憲章を始め、多くの関連法規が存在しているのです。ところが、多くの方が自分の幸せの追求にのみこだわり、直接に関係のないことがらについては、「我関せず」という態度をとるのが現代の世風でございます。

去る二月八日、私は幸にも施設の職員と子ども達との会食の機会を得まして、直接に職員や子ども達と接することができました。子ども達は、今、職員の方々のご努力によって、恵まれた環境で、それぞれの職員になついて我がままを言い、喜々として行動し、何等一般の家庭の子ども達と変わることのない生活です。お世辞にも豪華とは言えない食事でしたが、職員の心のこもった立派な献立に、子ども達が目を輝かせて舌つづみを打つ様には「この幸せをいつまでも」と祈らずにはいられませんでした。また、それと同時に新任理事としての重みを感じたわけでございます。

願わくは、この子ども達の生活が単なる大利根町に存在する施設としてではなく、大利根町の世帯の一つとして隔てのない交りが深められることになるよう、町民の皆様方のご理解とご支援を希望するものであります。

私の抱負

理事　小川　久子

どんよりとした空からは、今にも雪が舞い落ちそうです。顔にあたる空気は痛い程冷たい。こと国営武蔵丘陵森林公園で二月十一日完走マラソン大会が開催された。私も娘の応援に参加した。まわりの木々は静かに冬眠。沼に散乱する鴨の群れが大会前の緊張感をほぐすかの様に賑やかに歓迎してくれる。老若男女問わず三千人参加、人、人の波、冬の静かな公園は熱気に満ちて居る。力いっぱい走る〃健康〃平和な光景だなとつくづく思う。

昭和三十六年我が国にスポーツ行政の基本ともいうべきスポーツ振興法が定められ大利根町にも体育指導委員制度が発足、私も昭和四十五年に体育指導委員の委嘱を受けた。生涯にわたって健康体力づくりの推進が「明るい豊かな街づくり」につながる様微力をつくしてまいりました。走る事が出来ない人は歩け歩け一歩進めて、歩け十音楽＝ダンス、バレーボールを通じてコミュニティづくり、婦人会活動と二十年間皆様の御指導御鞭撻をいただき今日に至って居ります。

その私が社会福祉法人光の子どもの家の理事にと町からの依頼を受け戸惑いました。学識も浅く福祉に対する知識もないからです。しかし家庭の皆からお母さんは何をやっても一生懸命だからと励まされ友人からは助言をいただき引き受ける事に致しました。今まで私なりに色々のサークルで福祉とは「思いやり、いたわり、暖かい心」ですよと説明して来ました。これからは正しい知識を身につけ光の子どもたちが心身ともに健康な毎日が送れます様に町民の皆様と共に努力したいと思います。暖かい御協力を心からお願い申し上げます。

エッセイ

公園の子ども

俳人　永作　火童

道一本をへだてて公園がある。子どもの遊び場が申訳程度についているほかは、花壇はもちろん噴水もない平凡な町中の公園だが、不均合いのように木だけが大きい。見方によれば大変自然的だといえるかも知れない。

平日はデモの集会でもなければ人影を見ることもなく、忘れられてしまいそうな存在だが、それなりに四季の移ろいを見せてくれるので私なりに好きであった。しかしこれだけ近いと見ているだけで満足するのか、改めて行く気にもならず、散歩にも余り利用することもなかった。

二月のある日曜日であった。立春を過ぎて二度ほど降った雪も寒さだけを残してすぐに溶けてしまい、春めいた明るい日ざしを投げかけていた。急に芽ぶきを見せた柳の揺れに誘われるともなくこの公園を歩いてみたくなった。さすがに桜のつぼみはまだ固かったし、「すずかけ」の古実は初冬のころのままである。広場で遊ぶ人たちの間を通り池の方へ歩いてゆく。砂場や「ブランコ」で子どもを遊ばせている母親、池で釣をする父と子など、いかにも平和な風景が私には物珍らしかった。

藤棚の下までくると十才位いの少年がかがんだり、立ったりしながら何事かに熱中している。立ち寄った私の方を見向こうともしない。よく見ると地上に漫画の主人公らしい人の顔と上半身が大まかに描かれている。それに向って太い釘を懸命に投げつけていた。釘はそのつど倒れたり、うまく突立ったりする。どうやら回数をきめて交互に試み、刺さった数を競っているようである。得点と思われる○と×印が沢山書かれているところを見ると、大分前から続いているらしかった。

それを見ているうちに私の少年時代が思い出されてきた。もちろん戦前のことである。

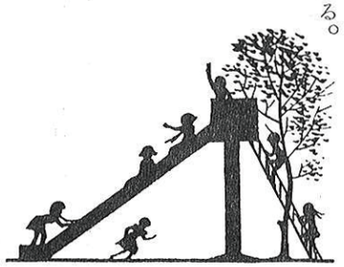
学校から帰るなりカバンを投げ出しては遊びに飛び出す毎日であった。子どもの遊びには計画性などなく、その時々の思いつきで行動した。円を描けば角力になり、棒をもてば「チャンバラ」とか「戦争ごっこ」になった。遊びの道具を親にねだることもなかった。こづかいで買える「メンコ」や「ビー玉」それに「ベーゴマ」ぐらいで満足していたし、駄菓子屋でなけなしの銭を使ってしまうと、文句をいわれながら紙芝居をタダ見したものだった。

たまたま誰かが家から自転車でも持ち出してくると、大騒ぎで皆で乗るのだが、何しろ大人用だから足が届かない。そこでペタルを踏むのに横から足を入れる形の「三角のり」になる。初めての子どもにはウルトラC級のわざ、試みるたびに転倒して膝やヒジが擦り傷だらけになる。そこには「ツバキ」をなすりつけてはまた乗るのだった。よく飽きもせず日暮れまで毎日遊んでいたものである。

そんな思い出から、ふと気付いて周囲を見廻して見るが先ほどの三人を除くと、あたりに小、中学生ほどの子は全くいない。日曜日なのに遊んでいる姿が見当らないのである。ということはたとえ勉強にせよ、テレビ・ゲームを楽しんでいるにせよ、家にこもり戸外に出たがらない環境というのは何なのだろうか。子どもから戸外での時間を奪い、遊びを通じての友達作りを稀薄化させるだけではなく、それは幼児からいきなり大人の生活へ移行であって、少年期の喪失と変りなくなる。

たまたま見かけた公園の二人の少年は今という時間ではなく、半世紀前の時間にいたような錯覚にとらわれながら出口に向って私は歩きはじめた。

二人の少年はまだ同じ遊びを続けている。



現場から

心細さのなかで 3

上棟　圭子

寒さが厳しくなって来ました。光の子どもの家も北風がビュービュー吹いて刺すような冷たさです。元気で外で遊ぶ子どもたちですが、Nちゃんはなぜか〝さむい！〟と外へ出て行くのを嫌がります。お天気の良い日に励まして外に出しても、すぐ〝さむいー〟と泣きながら帰って来てしまうNちゃん。随分泣き虫甘え虫になってしまいました。

寒いといえば、最近トイレに行くのを嫌がるようになりました。〝オシッコしておいで〟と言うと泣いて反抗します。やっとの思いでトイレに行くと今度は手を洗うのを嫌がるのです。寒さもあるのでしょうが、保母の言う事に悉く逆うのです。それも〝イヤ〟と言うのではなく泣いて保母に当たって反抗します。半年前の夏の日、オシメをしていた子とは信じられない程の急成長に喜びと戸惑いを感じています。その反面、今まで出来ていたことも〝できない！〟と泣いてしまうちょっと変わった第一反抗期です。普通は何でも〝自分で〟やりたがるのですが…。反抗期は自我の芽生えです。大切にしていきたいと頭では分かっていても、私が何か言うと泣いて反抗する、わざと逆の事をやる態度にはつい頭が爆発してしまいます。そのひとつは食べ物を粗末にすることです。食欲の固まりのNちゃん、今年からハシも使って上手に食べられます。手づかみで口にほおばるだけほおばってボロボロこぼしていた頃に比べ、これもすごい進歩です。でも今度はわざと口にほおばり吐き出します。注意するとものすごい勢いで食べてしまいます。落ちてしまった物を足で踏んで遊んだり、頭からかぶったり…。反抗期だから、小さいからで済ましてはいけないと思います。2才のNちゃんにどれだけ理解出来るか分かりませんが、〝これだけはやめてほしい〟という事は分からなくても本気になって叱るべきではないでしょうか。〝○○しないで〟〝○○してほしい〟という私からNちゃんへの願いなのです。Nちゃんを抱っこしながら叱ります。お尻を叩くより通じる様子です。それでも私はNちゃんの伸びゆく芽を摘んでしまっているのかもしれない、そんな思いの毎日、心細さはNちゃんの入所の日と今も同じです。

「けいちゃんのお母さん、Nちゃんね」と保母を赤ちゃん役にし、自分はすっかりお母さん気分です。「けいちゃん」「はーい。お母さん」「うん？なあに？」「お母さんお腹すいた」「すいた？まってね。（鼻がつまっていて待ってねがバッテテネになってしまう。）」「ハイ。ご飯よ」「お母さん、ねむい」「うん？ねむいの？よちよち。いい子いい子。ねんねん」。「あっ！お母さん。オシッコしちゃった」「どれ？見せてごらん。ダメでしょ。おしりペンペン！」「ごめんなさーい」「泣かないの。ほら、鼻、鼻拭いて」（と、ティッシュを持って来る）お母さんどっこは日頃私がNちゃんに言っていること、やっていることがそのまま出ていて時々ドキッとしてしまいます。〝お母さん〟と呼んで〝なあに？〟と答える時のNちゃんのすました顔と声に、これからおしゃまさんになるだろうなど今から思っています。

自分は赤ちゃんではないと言い張るNちゃん。お姉さんへの過渡期を迎え初めているのでしょう。ホカホカ暖かい春が来たら3才になります。友だちの誕生会ではいつも興奮して、保母の手をかんだり、ひっかいたりしてしまいます。人一倍喜び人一倍泣くNちゃん。興奮すると着ている洋服を全部脱いでしまう変なクセもあります。Nちゃんの誕生日には自分で自分にかみついてしまうのではないかと心配（？）してしまいます。そして3才になったら、泣き虫を少しずつ直していきましょうね。

現場から

一年生保母の報告

石毛 照子

―12月25日　午後4時30分―

光の子どもの家のマリア様が、母の胸に帰っていった。9月26日入所以来、3ケ月弱のここでの生活は病いの母が健康を回復して迎える日を待つ為の長い長い月日であり、集団の中で我慢させられることが多かった生活であったであろう。されどHちゃんの心の中にこの3ケ月の生活がプラスになるよう願う。また、Hちゃんのすばらしいお母さんへも願わずにはいられない。

この親子を見送る為にすべての光の子どもの家の住人が集まってきてくれたが、その中に一組の親子の姿があった。この親子の気持ちは察するに耐えがたいものがある。Tちゃんの実父が初めて来園したのは12月8日。玄関で会った時の親子は、一瞬時が止まったかのように立ちつくしていた。「お父さんよ。」という声でお互いの風が交わり、ひとつになり、歩き出したように思えた。一日ずっと一緒にいて、帰り際に「僕も帰るの。」と素直な気持ちを出すTちゃん。父親が目の前にいるのに一緒に暮らせない不条理。これから数多く体験してゆくのであろう。それを乗り越えられる強さを培えるのだろうか。また、保母と同年代、あまりにも若く、現代の若者を地でゆく父親にどのように親子関係を作ってゆくお手伝いをすればいいのか、とまどってしまう。

前に進めなくても、Hちゃんの欠けを埋めることが出来ずにいても、生活は次の日から始まる。師走は忙しい日が続く。クリスマスは、当日、Tちゃんが39度以上の熱でダウン。幼稚園から、先生や友達も来てくれたのにページェントの晴れ姿を披露できなくて残念。しかし、サンタが夢とプレゼントを運んでくれて子ども達も大満足。

光の子どもの家での初めてのお正月、Tちゃんは父と共に自宅にT君は保母宅へ。岩崎保母担当のMちゃんと12月27日に入所してきた3才9ケ月のK君は、施設で過ごすことになる。

大利根の埼玉大橋で初日の出を見ようと子どもと共に出かけたが残念ながら初日の出は拝せなかった。しかし、さわやかですばらしい朝であった。

保母宅へ来たT君は「てるこさんのお家、お父さんとお母さんとお姉ちゃんとおばあちゃんとねこちゃんとワンちゃんとブーブがいたの。」と楽しそうに話すT君。動く動物が恐しくて近くに来ると逃げて歩き、少々居ずらかったかな。しっかり者のT君だが、1月3日でやっと3才になった。ケーキの上の3本のろうそくが細やかに燃える。生きている喜びがT君に少しでも多く降りかかる生活ができたらと思う。誕生日を祝い、溜息がでるほど甘やかされ、かわいがられて帰ってきた。保母宅との関係も今回限りなどというのではなく、成長を見守れる位の関係になれたらすばらしいと考える。

Tちゃんとお父さんの後ろ姿を心配しながら送り出してから4日後、こんなに変われるものかと驚くほどの笑顔で帰園。お父さんの様子からも、楽しく過ごせたことが伝わってくる。また幼稚園の保育参観にも来て頂き、日に日に父と子のつながりが強まっているように思える。その中で、これからどのようにしていっていいのか、切れない道の様な関係にと、ついつい焦ってしまうこの頃である。

5才と3才の男の子の腕白ぶりに、少々閉口しながらも、もっと逞しくなってほしいと願う。

もうすぐ新年度、一年生保母ではいられなくなる。卒業しなくてはならない不安を覚えつつ、自己の反省を取り組みの反省をしながら、新年度の一歩を踏み出したいと思っている。

現場から

入所第一号 4

竹花 信恵

春の日を前にして、園庭がまたにぎやかになってきました。遊ぶことが仕事であり、勉強である子どもたちです。思いっきり、かけまわって遊んで、一日のしめくくりは、みんなの大好きなおふろです。家庭サイズのおふろですから3人の子どもと保母で湯舟は超満員、サンタさんからのプレゼントの水でっぽうの水が飛びはね、洗面器からスポンジまで、何でもおもちゃに早変わり。

何げなく手おけの水をこぼしてしまうと、「もう！せっかく、のぶえちゃんのだあいすきなコーヒー、いれたのに！」とTくんにおこられてしまいました。2才11ケ月でこの家にきて半年、たくましく、そしてひとまわり大きくなりました。ただ今体重十七キロ、原田家は腹田家ではないか、という声も聞こえてきます。姿勢のいいお兄ちゃんに変わりつつあります。いつのまにか「タコ」とは、ほとんど言われなくなりました。

もうすぐ4才の誕生日を迎えるMちゃん。とっても寒い時に、この世に生まれました。生まれなかったらMちゃんと会えなかった、その不思議さ、かけがえのなさを大切にできますように。本当におめでとう。マリアさまの姿のMちゃん、とってもすてきでした。今でも心にきざみつけて、クリスマス聖誕劇の歌を部屋いっぱいにひびく声で歌っています。でも、とっても恥づかしがりやで、その美声を皆さんに聴かせられないのが残念です。4才になるまでに、そして幼稚園入園までに、せめて排泄、そして偏食の克服を！という基本的生活習慣の確立を目ざしました。それ以上に、お人形に代わる、たくさんの友達の中で育ち合っていく姿を通して、すばらしい笑顔のMちゃんになれました。今日も仙道家のNちゃんたちとねんど遊びが始まりました。ブロッコリーもかいわれも、まないたもほうちょうもでてくる会話に、飛びちるねんどのあとかたづけを気にしながらも、楽しませてもらっています。

就学の日が一歩一歩近づいたMちゃん。たくさん甘えられるようになりました。その一方、いつのまにか優しいおねえさんになってしまい、おどろかされます。Mちゃんにとっては、まだまだ足りないことばかりでしょう。日々やわらかくなっていく表情にはげまされながらの試行錯誤で、いろいろなことを教えられました。おんぶもダッコもされないでこの家にきたのかも知れません。少々おくれましたが、そんなことも経験できたこと、Mちゃんには何より必要だったのでしょう。大きくなったら看護婦さんになりたい、そんな夢をナイチンゲールの本を片手に伝えられるMちゃんです。

日を当てようと、室内の植物を外に出しておいて、そのまま忘れてしまいました。気づいた時には葉に力なく、霜枯れています。そんな失敗、怠慢さにもかかわらず根が支えているおかげで活きかえりました。また水が多すぎたり、足りなかったりの乱暴さ、せめて毎日、「見る」ことを枯れて元気のない葉をみながら思いました。できることは多くはないこと、そして、それさえ忘れてしまう私たちに、子どもたちをまかされている、幼ない大事な日々の積み重ねをまかされていることを胸に、新年度への準備を始めました。

光の子第一号たちが、それぞれ根をのばしつつあることを、心から感謝しています。そして3人の強い輪が、新しいお友達を優しく迎えるために、強くつないだ手をまたつなぎなおして輪をつくる日がもうすぐです。ひとりひとりが豊かに育っていける輪になれますように。

現場から

育ちゆく子らと
――入所第一号――

秋元　光代

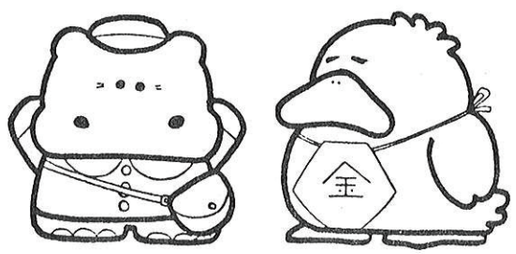
「あなたに担当を持っていただきたい。TとH姉妹を持ってもらいたい。」職員会議のやりとりで一瞬、頭の中が真白になり、子どもたちの顔が浮かんできました。T君、三才のMちゃん、六才のMちゃん。六才のMちゃんの顔が浮かんだ時、初めて、なんて大変なことをいわれたのだろうと怖くなりました。入所第一号の三人。担当の竹花保母が一生懸命取り組んで、急激な成長をさせてきた子どもたち。もし誰かに、「同じ原田家の保母として、この半年のうちに、あなたはこの子どもたちのために何をしましたか」と聞かれたら、「何もすることができませんでした。子どもたちについていくだけで精一杯だったのです」としか答えることのできない私が、どうして、この三人の子どもを担当することができるのでしょう。でも、私はそれを受けてしまいました。〝デキマセン〟〝ムリデス〟とは言えませんでした。その言葉を口から出してしまったら、自分の心の中で、この三人を拒否してしまうことになるような気がしたのです。いくら自分が未熟であっても、この場合、この三人を担当できないと思うことはいけないことだと思ったのです。自信のなさを、やっとの思いで言葉として口の外へ押し出すだけでした。

同じ家でいっしょにくらしていても、担当者と非担当者では、子どもに対する思いも異なっていますし、子ども自身の心の中での保母の存在の大きさも違っています。ですから、担当を替えるということは、その家だけの問題ではなく、他の家も含めて、職員全員の意識をかえてもらわなければできないことだと思うのです。まず、自分の意識をかえることが一番の課題でした。ある先生のおっしゃった、「子どもを愛することと、かわいがることは違う」という言葉が、いつも浮かんで来ます。今の私の態度はどっちなんだろうという不安と共に。

これから、どのように、この子どもたちと接していったらいいか考え惑っている時、フッと職員研修会の時に考えたことを思い出しました。「私ひとりで育てるのではない」どの子どもを担当しても、竹花保母はもちろん、池田保母、他の家の保母、男子職員、みんなの力をかりて育てなければいけないのです。みんなの協力があればやれるかもしれない。勇気がでてきました。でも、自信がでてきたわけではないのです。私が受け持ったために、子どもの状態が元にもどってしまうかもしれない。成長が停まってしまうのではないだろうか。そんなことばかり考えてしまい、不安と戸惑いでいっぱいです。

4月から、姉のMちゃんは小学校へ、妹のMちゃんは幼稚園へ行きます。子どもにとってとても大切な第一歩、うまくスタートさせてやることができるでしょうか。不安は尽きません。あと一ケ月半、どのように子どもたちと関わっていったらスムーズに交替できるのでしょうか。担当するにあたって自分の意識を大きく変えるのに半月かかりました。これからは、特に子どもとの関わりの中で、子どももいっしょに、少しずつ変えていかなければならないと思います。

「担当だということを自覚して、子どもに期待をして下さい。その気持ちが子どもに伝わっていくんです。」子どもに、なるべく無理のかからないように注意しながら、徐々に関わっていくようにしています。私の中で、子どもたちへの思いも、徐々に変わりつつあります。



養護メモ

心の貧しい者は……

養護施設光の子どもの家は、おとなと子どもが〈家族〉のように暮しあうことを願って造られた。

ホントウの親だったらこんな時どうするのだろう。家族だったらどう考えるだろうか。食卓の囲み方、添い寝の位置などなど。〈家族〉のような暮し方の試行が続けられている。この頃どうやらそれぞれ、それらしい暮しのかたちがつくられはじめている。そのかたちが〈家族〉に限りなく近似したものになるにしたがって、親や家族ではあり得ない現実が痛切の度合を加えて迫ってくる。

養護施設に子どもたちの殆んどは、親か家族の誰かに伴われて入所する。ここに入所した十四名のうち十一名はそうだった。そして入所後に父や母に連絡がとれているので、全く家族と連絡のつかない子どもはいない。

親に抱かれて入所した子どもについて、その親の子どもの抱き方を正確に観察し、私たちがそれと寸分の差異もなくその子を抱くことができたら、子どもの持つ不安をその分だけ取り除くことはできるだろう。しかし、子どもは親に抱かれているとは思わず、むしろ親とは異うことを意識したり感じたりするだろう。抱かれている事実は全く同じであっても、受けるものは等価ではあり得ない。

子どもの親である誰かが、自分の子どもを施設に入所させたいと願うだろうか。そこがどんなに子どものために創られたものであったとしても。どの親にとっても子どもにとってもそれは願わしくも誇らしくもないことなのである。

施設の子どもにとって最も切実な願いは、父や母に愛されて家族といっしょに暮すという決してぜいたくなものではないのである。

入所している子どもの家族は、毎日子どもと暮すわけにはいかないが、月に一日ぐらいは一緒に居ることは概ね可能なのである。

このような家族――とりわけ親たちと一緒に子育てにあたることを私たちは志向している。私たちが担うべきことを確認し、親でなければならない部位を担ってもらうのである。生活のしかたやこんな子に育って欲しいという願いを考え合い話合いながら協力して欠けを補うこと願うのである。

そのことを子どもが家族と暮す時間を拡大していく手がかりにし、家庭で暮すための障害を、児童相談所、福祉事務所等と連携しながら解決することをめあてにして。

昨年末、母親の入院によって三才で入所したK君を担当した佐藤家の岩崎は、設楽福祉司と相談し、母親と連絡をとりつづけた。そして施設でお正月を過したK君と、入院先に母親を見舞った。病室に入ったK君を認めたその母は「Kちゃん」と一言。そして、一ぱいに見開かれた目に溢れて流れる涙の顔で抱きしめる姿に、ともすれば自分の病気にかまけてしまい、子どもへの思いがスリ切れてしまいはしないだろうかとの懸念も吹きとんでしまったのである。

岩崎のその後のかかわりによって、手紙や電話のやりとりが深められ、入所の頃にあったK君の表情のかげりは今はない。

二度目の見舞に出かけた岩崎は自分が担当しているもう一人、母親の養育拒否、虐待によって入所したAちゃんは、固い拒否の姿勢を未だに変えないばかりか、その度合をますます深める母親の故に、家族や親族とさえかかわることができないでいることに思い悩む。

Aちゃん以外の子どもたちは、親、兄弟あるいは家族と何らかのかかわりを持っている。佐藤家にTちゃんの父親が訪ねて来てくれる。妹と連絡がとれるO君も居る。他の子どもたちと落差をどうするのか。何ができるのかと思いあぐねて日を重ねる。親になれないもどかしさにイラだってしまう。

最近、毎月一回だけは自分の休日をAちゃんにプレゼントしようと岩崎は思いたった。気のやさしい職人気質の父親と、少々ダイナミックだがホッとできる生活をつくりあげている母親の住む横浜の自分の家にも連れていこうかな、などと考えはじめている。ためらいもなくこんなとりくみを惜しまない仲間の暮しがここにある。(G)

日誌抄

八五年一二月一六日～八六年二月一五日

一二月一七日、町内江森理容店よりお菓子つき調髪のご奉仕。感謝。同日、仙道家のKちゃん三才の誕生祝。仕事で忙しいお父さんもかけつけて、楽しく。

二〇日、法人の窮状をみかねた有志数名が「子どもの施設を考える会」を結成、浦和駅頭で街頭カンパ活動を開始。二二日付読売新聞埼玉版に大きく報道。上尾市立尾山台小学校六年生の友だちや岡野先生たちのカンパとプレゼントが駅前まで届けられたり、多くの市民のご協力や、一緒に街頭に立って下さる方々、施設までかけつけて激励して下さる人々など大きな反響が年末まで続く。活動は七日間行われ、総額十八万円余が、同会代表より法人に寄付されました。感謝。

二四日、当地で迎える初めてのクリスマス・イヴを讃美礼拝をささげ、静かに過しました。子どもたちが眠りにつく頃、理事長夫人のお手製の衣装でサンタが登場。尾山台小学校のお友だちのと、担当者手づくりの品じなを、夢うつつの子どもひとり一人に抱きあげてプレゼント。

二五日、クリスマス。幼稚園のお友だちとお母さんたちと先生方と。原道小学校教頭先生、地域の方々や、子どものご家族も。調理士の中村さんや先生たちが心をこめてつくってくれたクリスマスディナーをいただきました。礼拝として、待降節の間に練習したページェントを、子ども職員、お客さまと一緒に。そして祝会も。楽しい一夕でした。

二七日、お母さんの入院でK君三才が入所。佐藤家岩崎保母担当。

二八日、ボーイスカウト栗橋隊の皆さん大勢で、もちつき大会。オナカいっぱい、ごちそうさま。

三〇日、せめてお正月を家族といっしょに過せる子どもたちが帰りはじめる。帰れない子には、担当保母の家へ行ったり、楽しいお正月を過せるよう準備して。

一九八六年一月一日、埼玉大橋に初日の出を見に佐藤家などが。午前九時、全職員と子どもたちで元旦礼拝、お雑煮を食べながら新年の挨拶と抱負を。

五日、職員会議、新年度へ向けてのとりくみを確認。

一二日、株式会社タナカ様、トラック満載の日用品をご寄贈くださる。ありがとうございました。

二月七日、町内の針谷広一氏、羽鳥区長さん等の協力で、自慢の手打そば講習会。見事な手捌きとおいしいおそばに全員舌鼓。

八日、第五回理事会。小林義雄、小川久子両氏選任される。同日、家庭養護促進協会の岩崎美枝子氏来訪。鋭い問題意識と地道な活動の報告に刺激される。

十日、N君二才が入所。担当は替えない原則を検討の上、H姉妹T君を秋元指導員に変更し、原田家竹花保母担当。

一二日、自由人権協会が、一、入所児童の年令制限撤廃。一、施設開設遅延による運営費の補填。一、連絡協議会の縮少、廃止を厚生大臣、県知事、町長に要望。

一四日、M君二才入所。仙道家倉沢保母担当。同日、原道小学校入学説明会、Mちゃんと秋元指導員。同日、埼玉県養護問題研究会、二四名来訪、夜遅くまで熱心な論議が。

反射光

○多くの人々の祈りとご支援により新しい年の歩みを始められました。感謝の集いの祈りに町内の小林氏の寄贈された園庭の梅の蕾も咲くばかりとなり、確かな春を告知します。○設立当初からお励まし下さる俳人永作火童先生の心温る玉稿で紙面を飾りました。先年肺癌を克服され、寸刻、死界を幻視されたとは思えぬご快復を喜び、感謝致します。○早春の風の中、歓声をあげる一三名の子どもたちは、確実な成長を豊かに変化する表情に見せます。○運命的出会いによる子どもと担当者の関係を大切にしようと、担当替えはしない原則できました。変則的な入所が続き、学童受入などのため例外的に原田家の担当を変えました。十数時間を超える検討と二ケ月の移行期間を設定して実施中です。○光の子どもの家元年を担った職員全員が新年度に向けて助走を始めました。夜を日に継いでの計画作成も急ピッチです。地元との関係も緊密なものへと変り続きます。更なるご支援を！（G）